

＊ 大正・昭和初期の天文台職員井上四郎氏のお孫、ひ孫さん来訪

アーカイブ室新聞18号から度々登場する井上四郎氏は大正9年から昭和7年まで東京天文台に勤務され、太陽の写真観測などをされていた。井上四郎氏は天文台官舎にもお住まいであった。現在83歳のお孫さんは幼い頃、三鷹村の東京天文台官舎の祖父を何度かお訪ねになったそうで、懐かしいのでぜひ訪れてみたいと長年思われていたそうである。祖父の遺品の中に天文学に関係するらしい洋書を見つけたことから国立天文台図書室に電話をされたことをきっかけに、アーカイブ室の中桐とコンタクトされるに至った。最初は井上四郎氏が持っていたというレンズ2個を国立天文台にお譲りしたいということであった。そのレンズをいただきに伺った中桐に、官舎時代の古いものをたくさん見せてくださり、非常に貴重な写真を見せていただき、あるいはいただいた。更に中桐が大正時代初期に建てられた1号官舎の保存と有効利用のグループにいたことから、大正・昭和初期に官舎で使っていたものを譲っていただく話にまで進んでしまった。写真1は天文台官舎1号の前で撮影した井上四郎氏のお孫さん、曾孫さんである。



写真 1

6月6日にお宅にレンズをいただきに伺った際、1号官舎に展示するためにいただいたものは桐の木で出来たさ手あぶり(火鉢)であった。今回、提供を申し出ていただいたものは、1)昭和初期のラジオ、2)陶器製の火鉢、3)「ひのし」(火熨斗)(炭火を入れる鍋型のアイロン)、4)産湯用たらいである。これらの図をお持ちになったのが、図1である。これらは次に中桐がお訪ねする際、いただいでくることにした。

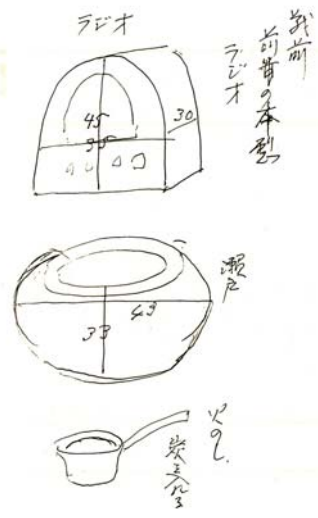


図 1

ここで「ひのし」について書いておこう。中桐は「すばる」建設のために、その建設期の1994年から2002年の8年間ハワイ島で過ごした。ハワイ島には日本から移住された2世、3世が多く生活されていて、大正の頃の古い日本の言葉が残っていた。アイロンの事を2世、3世の方が「ひのし」と言うのであった。中桐の子供の頃、田舎の家では船の形のような煙突のついた炭火を入れるアイロン(写真3)があった。しかし、「ひのし」とは言わず「アイロン」と呼んでいた。今回、いただけることになった「ひのし」は写真2のようなもので、炭火を入れるなべ型のものである。また同じようなお袋や、姉が和裁に使っていた「こて」(写真4)と言うのがあって、火鉢の炭火の中に突っ込んで暖め、和裁に使っていた事を覚えている。そう言えば、私が子供の頃、半田ごては炭火のなかで熱くして半田を溶かしていた。



写真 2



写真 3



写真 4